
「逃げたっていい。また戻ってこられるんだったら」

鹿嶋 由佳里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「逃げたつていい。また戻つてこられるんだつたら」

【Zコード】

Z99731

【作者名】

鹿嶋 由佳里

【あらすじ】

塾の講師である坂本くん（29歳）と、その彼女のあられちゃん。二人の心の闇をゆっくり紐解いていくうえで人生にはしばしば余暇が必要であるということ。

そして、そのあとには「何があつても、現実に戻る必要があるのだ」という反する2つの思想を一人の記憶をたどりながらえがく。うつうつとしたあられの闇とは？また、坂本くんの洗濯機は見つかるのか？理解をこえた、何気ない日常が存在する。

第1話 洗濯機の空象（くうじょう）

洗濯機がない。

仕事を終えて帰ってきた僕は違和感をおぼえて、ベランダのスペースを確認する。

やっぱりない。

「松下製 RW-4645」の空象。

枯れた葉っぱやほこりが、もとあつた洗濯機の形を明確にしているだけであった。

朝出勤し、現時刻である21時までの12時間の間に失踪した洗濯機。

あられ「あなたに対する悪意かな？警察に通報したりしないの？」

坂本「しない。」

あられ「どうして？やけに投げやりじゃない。くやしくないの？何者かわからぬ他人の汚れを落とすためにこき使われる坂本くんの洗濯機。」

僕は、赤いシャツと緑のTシャツが渦に振り回され、それぞれの原形はゆがんで絡まる」となく同じ方向にかき乱されてゆくのを想像した。

はじめは赤と緑は別々のものであり、違うものが2つあるかのよに見えたのだが、時間の経過につれてそれらは2つであるのか1つ

であるのかわからないよ。うな。

そして、もとはシャツであるかTシャツであるのかがわからない物体にかわってゆくのを想像した。洗濯という行為とは、よじれをあとすことであるが、それだけではないんじゃないかな。僕はふと考えた。

僕は、過労氣味の洗濯機には氣の毒だが犯人たちも好きなだけ靴下だとか、帽子だとかについたホコリや髪の毛だとかを落とせばいいと思った。

ただ、何も入れないでスタートボタンを押すことだけはやめてほしいと祈る。せめて、靴下の片方だけでも入れてやってほしいんだ。

坂本「そのうち見つかるよ。」

あられ「そうゆうものなのかなあ？」

小難しい哲学者みたいな容姿。黒髪の中わけヘアスタイルは、80年代のトレンドドラマに出てくる役者のようだ。あられは鼻でフフッと少し笑つたあと、ペンと白い画用紙を取り出した。

あられ「わたしが犯人のモンタージュを書き上げる。」

第2話　N.O.T.～あらわの感覚と経験（前書き）

あらわは、27歳の会社員である。坂本くんに出合つて前回も痛手を負つたことがきっかけで、軽度のうつ病になり病気休暇をとったことがあるのだ。そのきっかけになつた事件とは・・・

第2話 N・P・Rへあらわれの感覚と経験

あらわれは、失恋を望んでいた。そもそも、相手の男性には付き合つたといつ記憶がない。その現実を受け入れた時、結局は自分で克服すべき精神的な課題と実際の日々の業務とが目の前に同量の形をした実体となり、あらわれの目の前にざくつと現れることとなつた。あらわれは、はじめ何がおきたのかわからず、職場の上司である先輩に相談をした。船場さんは、職場では物事の仕切りなおしをするかのような舵取り役。いつも、あらわれの恋愛に少なからず補佐をしたり、時には苦言を呈したりするような、夢心地の世界と現実とを橋渡しするかのような門番のようだと思つてゐる。

職場では、はばかる話題であつたし船場さんは、あられをいきつけのバーに誘つてくれた。0・5階地下にあるそのバーは、ランプの多い店で、炎の揺らめきがあらわれの気持ちを比較的穏やかにした。その感覚は、恋をしていた自分の感覚に似ていたため恋愛の相談をするのにはづつてつけだつた。

あらわれは、大恋愛をしていた自分を振り返り、船場さんにゆづくりと話した。

あられ「恋愛とは、個人にとつては一助にはなりえるけれどそれ自体は実体をもつものではなかつた。依存が始まつたわたしは、完膚なきまでに崩壊してしまつた。まさか、わたしがふられるという形で恋愛を終えるとは夢にも思つていなかつたよ。」

夢中になつてゐる時間は何事にも代えられない感覚で世界を見ることが出来る。その感覚は、この世には存在しないような形をした万象を網膜に映し出してくれる。ふわふわと白っぽくも透き通つ

たちよつと大きめの鞠が夜空をコルコルと飛びよるような感覚。

それは、まるで絵画の中を浮遊するかのように別次元に存在できる時間にいると実感する感動。その中を、自分は散歩する。絵画の時間の中、相手は水であり、空気であり、風であり、砂のように自由自在に形を変えては裏切らない夢を見させてくれる。

しかし、その有頂天における透明感がずっとと続くことを祈った瞬間から崩壊は始まり、その夢の情景は揺りわはじめる。他者や社会がのぞきにきてはあられを搖する。

「ハリ」とこつごとに美しく居ることを否定し、嫌うかのように祈りを中断することを勧めるために隙間とこつ隙間に忍びこむとする。船場さん「でも、絶対に捨てはいけない。ひとつしかないものだから。」

職場で15ほど上司である人生の先輩である船場さんは言った。

わたしが失恋した直後のことだ。わたしは、職場でヒステリーを起こしたのだ。

わたしは、恋愛が人生ごと絵画のよつな時間に導いてくれると信じて疑わなかつた。しかし、その恋愛はピリオドがつたれることとなつた。

結局は自分の経験としてひとつ現実として形を結ぶときに始めて完成する。自分の人生にインプットしてひとつの冊子は完成した。恋愛はアウトプットするものではないのだ。相手を尊重するならばなおさら。

深刻に悩み、考えあられに船場さんは言った。

船場さん「折れないハートは恋愛にはいらない。時には、挫折が必

要だ。ひとつ恋愛を終わらせようとするとき、お互いの「美しくないところ」をわざと浮き彫りにして、2人の前に置いてやる必要があつた。荒行だつたかな。『めんね。』

あられ「いや、ええ、・・・うん。」

船場さん「でもね、必要悪つてわかるかな？マルクス的発想にパラダイムシフトしなければ、みなが気持ちよく仕事は出来ない。職場においては特定の人間の感情は優先されない。能率だとか、将来的に考えるとマイナスの影響を与えるものをあらかじめ伐採する必要がある。少数の人間の血よりも将来的に流れることになるだろう大多数の血を経験則から予知し、未然に抑えることが必要だつたんだよ。たしかに、あられちゃんという27歳の恋愛を少しわかつてきて、楽しみたいといい欲求のある一人の女性にとつては過酷と感じるかもしけないようなクールな判断だ。短い熱病だつたね。」

いたずらっぽい瞳をしている船場さんは、ステインガーをひとつ口に含み、あられの恋愛を反芻して言つた。

船場さん「イングの王様に恋をしてしまつたようなものだつたと考
えてこの恋はもう終わりにしよう。あられちゃん。」

あられは、職場に研修できた男性に恋をした。あられは、その男性の素性を知らなかつた。恋が始まつたときあられは、その人に会えるだけで嬉しかつた。白いテンのよつなほつそりと立ち回る姿を見られるだけでも嬉しかつたし、声も、接遇にも愛を感じていた。少しでも近づきたいとプライベートで電話をかけたあられ。それが、崩壊へのシナリオが動き出した瞬間だとはわからなかつた。

男性は激昂した。仕事に来ることが出来ないと告げ、3日間音信不通となつた。

それにより生じる被害をこうむった人間たちからの非難はあられ集中した。その男性の感情を逆撫でしたことで、職場に居づらくなってしまった。あられの精神も、彼の精神に連携するかのように崩壊してしまった。

「もう、死にたい」と、思わず職場で口に出してしまひほどに、あられの中からは悪いものがすべて出でてしまったのだ。あられは、なぜ、こんなによくないことがおきているのかが分からなかつた。

少し、時間が経過した、その事件の1週間あと現実を知らされた。

その男性は、あられの働く会社の税理士の息子であつた。非常に利害の絡む相手であつたし、その男性には結婚を約束した恋人がいた。真実、この恋は、あられの思い過ごしであり男性には恋愛感情もなく、その意思もなかつた。

背骨がうずき碎け散るかのような感覚の中、なんとかして、息吹を吹き返した。船場さんに相談してみると決めた背骨のうずきがおさまつた。

船場さん「「禍福は糾える縄の」とし。」だよ。あられちゃん。僕、もしも死にたいって思うことがあっても、それは恍惚とした恋愛の有頂天時におけるあの感覚がずっと続きはしないのと似ていると考えてくれるかな?要するに、一過性のものだよ。だから、少し休んだらまた、仕事に精を出してね。悪いことも、よいことも長くはづかない。それ以外の大体はそれほど刺激的でもないようなことばかりがつづき、あるときまた何かの感覚が生まれるのさ。」

船場さんは、そろそろ帰宅しなければいけないといい、お勘定を済ませ、タクシーを呼んだ。

あられは、もう少し反芻したいことがあつたし、整理する時間が必要だつたため新しい飲み物を注文し、船場さんが言つたことを思い出してみた。今まで自分が経験してきたことを内省するようつと

めた。

あられ「砂漠の荒れた大地に咲く、バラの花であると思つていたけれど、人間だつたのね。結局は、手が届くかとか手を伸ばそつかと、いう次元の話ではなく、恋をしてはいけない人だつたのよ。タブーだつた。

「インドの王様のような君。恋をした時間、かけがえのないものだつたよ。ありがとう。言えなかつたコトバをここで言わせて。『愛してる。』」

ランプの揺れにひずみを感じ、良くない感覚が背骨によみがえりそうになつたために、回想をきりあげ、家にかえつてゆっくり風呂にでもつかつて、へこんでしまつた自分を膨らませようと考えた。

お風呂は、へこんだ気持ちをかなり膨らませてくれる。はき捨てたいような過去の汚点だとか、失敗だとか自分の中からぶり返すどうしようもない蓄積物を思い切り吸い取つてくれるタコシボのようなお湯。

応急措置までならばしてくれる美味しい箱。

「今夜は長風呂決定！さあー！風呂将軍いくぞ！」

ほろ酔いの足をかばいながら、あられは帰路につく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9973i/>

「逃げたっていい。また戻ってこられるんだったら」

2010年10月15日18時54分発行